

自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (3)*

—サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者の調査的研究—

藤原 武 弘**

問 題

聖ヤコブ崇拜は、聖ヤコブのスペインでの宣教活動とガリシアにおけるその墓所の存在という二つの伝説に基づいて成立した (Bottineau, 1983)。

イベリア半島の北西部、アストリアスの最果てのガリシア地方で聖ヤコブの遺体が見つかった。使徒は東方を旅立ち、イリア・フラビア (現在ガリシア地方のエル・パドロン) に上陸し、何年もの間にイスパニアに福音を伝えた後、ユダヤの地に帰り、そこで殉教した。遺体は忠実な弟子に伴われてヤッファから船に乗せられ、奇跡による航海の果てに再びイリア・フラビアに着いた。使徒の墓は、内陸部の街から少し離れた所に建てられ、二人の弟子テオドールスとアタナシウスがこれを守っていたが、後にはこの二人の遺体も使徒の傍らに眠ることになる。奇跡の星の光によって再び見出され、まず、土地の人々の信仰の対象となり、ついでローマ、エルサレムに匹敵する巡礼の聖地になった。伝説の語るところによると、844年クラビーホの戦闘の際には、絢爛たる騎士姿のサンチャゴが姿を現し、キリスト教徒たちに加わり、押し寄せるモーロ人に襲いかかった。この出現により、その後、聖ヤコブはイスラム教徒に対する戦いの守護聖者となり、やがて国土回復運動や異教徒に対する十字軍の精神的指導者となった。

客観的な資料に基づく伝説の真偽についての議論は、本論文の目的の範囲外であるので、この点に関する経緯は Bottineau (1983) や Dupront (1985) 等の文献を参照していただきたい。

ただ1879年に聖遺骨が発見され、枢機卿パイヤ

・イ・リコによって、聖ヤコブとその弟子の遺骨であると教令をもって公認され、また教皇レオ13世によって裁可された。

当初ガリシア地方に限定されていたサンチャゴ巡礼は、10世紀半ばにピレネー以北に拡大し始め、11世紀末から13世紀に頂点に達する。その後、宗教改革期の16世紀にはプロテスタント諸国が聖人崇敬や巡礼を禁止した。またカトリック内部でも巡礼の世俗化批判や聖人信仰から聖母マリア信仰へと信仰対象が移動し、巡礼者数は大きく減少した。千年王国説 (ミレニアム) の影響で、20世紀末になりサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者は現在増加の一途をたどっている。

今日、巡礼は、隠喩的な意味で自分たちの人生や記憶を記すところの、喚起の場所として見なされている。しかし、もともと巡礼は、深遠な宗教的な体験だったということのを忘れるべきではない。

単一の場所、単一の民族、あるいは単一の文化から拡大してきたところのあらゆる宗教は、聖なるものとの交わりの形態から始まった。巡礼は有史以前から存在していたという証拠がある。メソポタミヤ、エジプト、ギリシャといった古代文明にも巡礼が存在していたという証拠がある。中世に始まったキリスト教やイスラム教の巡礼は、インドや中国での聖地巡礼同様、現在まで残っているものである。

巡礼は、罪の浄化、精神の極致、魂の救済を目的とした、個人あるいは集団で行われる儀式的な旅である。宗教的な体験とは、この世と天空の間に、個々の旅人と旅先での地域社会との間に、肉体の巡礼者と目標の完結で浄化される再生との間に確立される一連の絆である。こうした絆こそが他の種類の旅と巡礼を峻別するものである。

*キーワード：巡礼行動、自己過程、サンチャゴ・デ・コンポステラ

** 関西学院大学社会学部教授

巡礼は、聖なる旅、聖なる場所、聖なる目標を必要とする。聖なる場所は、樹木、泉、山、聖なる遺物が崇拜される神殿や街といった具合にあらゆる形態を取るかもしれない。聖地は、人間と聖なる対象の間の交わりが目にみえている形で顕現した物である。しかし、俗界の隠喩である旅の過程では、個人的な変換が生じ、到達の瞬間に極点に達する一連の儀式を通じて効果が強められる。そこで目標を到達した巡礼者は新しい人間として再生するのである。新しい人間の再生とは、心理学的に考えれば自己の変容に他ならない。藤原(1998, 1999a, 1999b, 2000)は、自己過程として巡礼行動を把握してその社会心理的なメカニズムを明らかにしてきた。従来の研究においては、サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼の歴史的な面からの研究(Bottineau, 1983; Dupront, 1985; 関, 1999)や文化人類学的な研究(Frey, 1998)はあるが、巡礼者の心理面を解明した実証的な研究は皆無である。また我が国における研究では、四国遍路、西国三十三箇所に関する研究が多く、諸外国の巡礼を扱った研究はきわめて少数である(巡礼研究会, 2000; 真野, 1996)。そこで、本研究の目的は、サンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼者を対象に調査を行い、巡礼者の実態的側面と心理的側面について明らかにすることにある。

方 法

調査対象者 サンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼者107名(男性56名、女性49名、無回答2名)

調査時期 1997年8月

調査内容 性、国籍、年齢、居住地、巡礼方法と回数、巡礼の日数、巡礼の出発地、共巡礼者の有無と人数、個人的信仰の有無、巡礼の動機。

調査手続 「ラ・コンポステラ」(徒歩で100キロメートル、自転車・馬で200キロメートル以上の巡礼者に発行する証明書)を発行している教会の事務室の前で、証明書を手に入れるためにやって来る巡礼者を無作為に選んで調査を行った。調査票はスペイン語、英語の二種類を用意し、スペイン人にはスペイン語で、スペイン以外の国からやってきた巡礼者には英語で面接調査を行った。

結果と考察

1 デモグラフィック要因から見たサンチャゴ巡礼者

男女比率については、図1に示したように、ほぼ同率であった。国別では、図2に示したように、スペインの巡礼者がほぼ4分の3を占めている。年齢別では、20代が36%と最も多く、30代27%、40代18%、10代、50代が8%、60代が3%と続く(図3参照)。図4に示したように、巡礼回数については第1回目という巡礼者が81%を占めている。

巡礼と国籍との関係は図5に示した通りである。この結果によると、スペイン以外からやってきた巡礼者は第2回目の割合が高いという特徴が見られる。

巡礼方法は、図6に示したように、徒歩が79%、自転車が21%であった。宗教意識に関しては、図7に示したように、巡礼者の86%が何らかの宗教を信仰している。信仰宗教の内訳に関しては、図8に示したように、カトリック信者が70%を占めている。

巡礼の動機に関しては、図9の通り、信仰、精神修養、観光目的が主要な動機である。信仰宗教と巡礼動機との関係は図10に示した通りである。カトリック教徒は、宗教といった動機を選択する割合が有意に大である。

出身地域に関しては、図11に示したように、Pais Vascoからの巡礼者が最も多く、以下Castilla y Leon、Catalunaと続く。誰と巡礼を行ったかに関しては、図12に示したように友人とが67.3%、以下独りが17.8%、家族とが13.1%と続く。人数別構成比については図13に示されており、二人で巡礼する者が多い。

巡礼の平均日数は13.7日で、平均巡礼距離は433.8kmである。両者の関係は、図14から図17に示したように、高い相関関係にある。とりわけ自転車巡礼者に比べて、徒歩巡礼者の関係性が高いことが明らかになった。

2 パターン分析

巡礼者の行動を多次元的に分類するために最適尺度法による分析が行われた(計算にはSPSSの

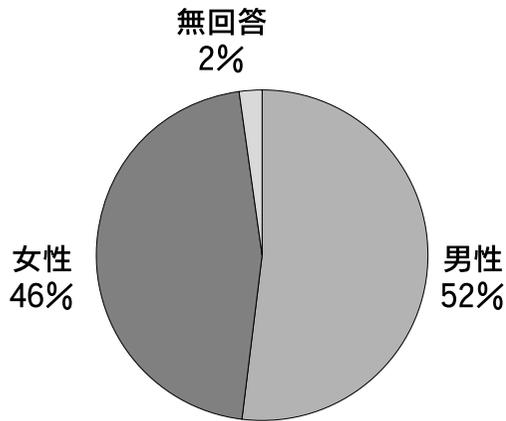


図1 男女別構成比

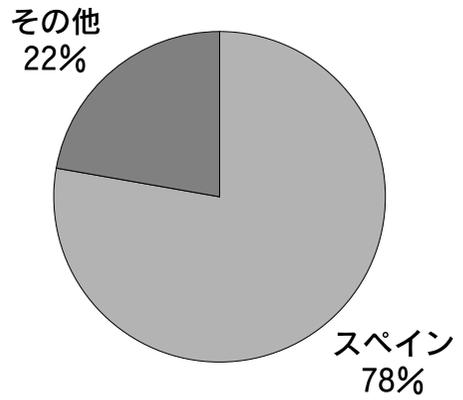


図2 国籍別構成比

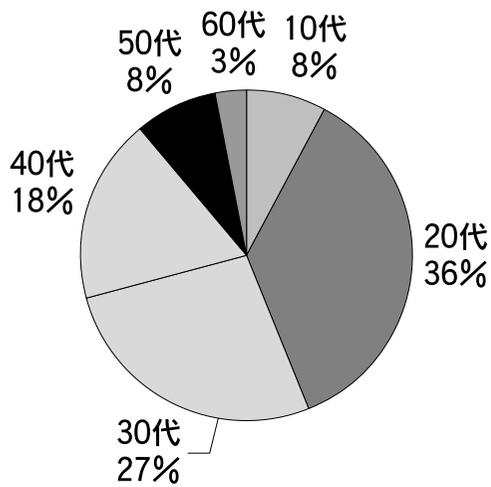


図3 年代別構成比

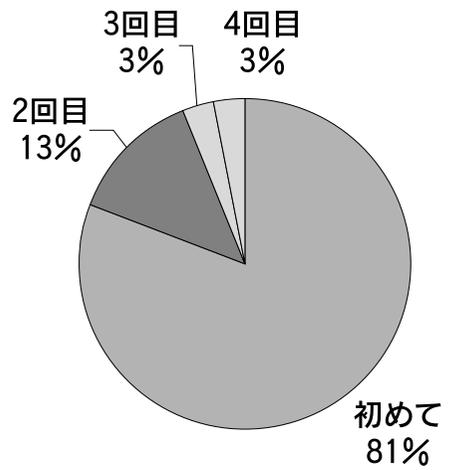


図4 巡礼回数別構成比

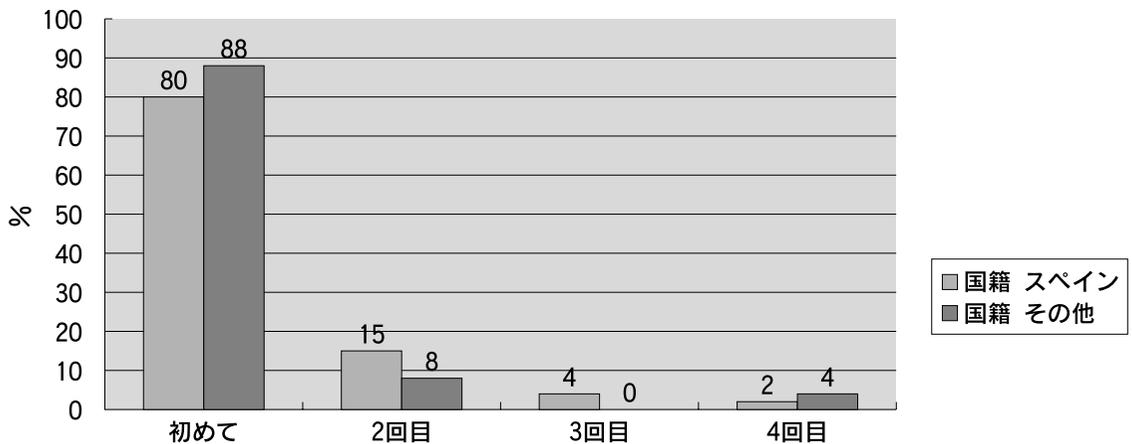


図5 巡礼回数と国籍との関係

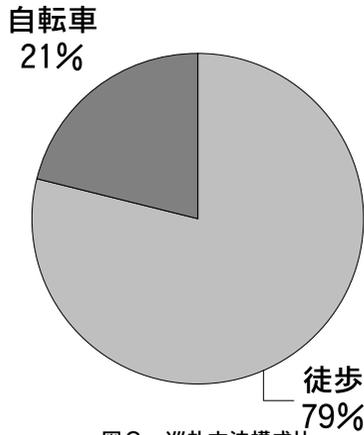


図6 巡礼方法構成比

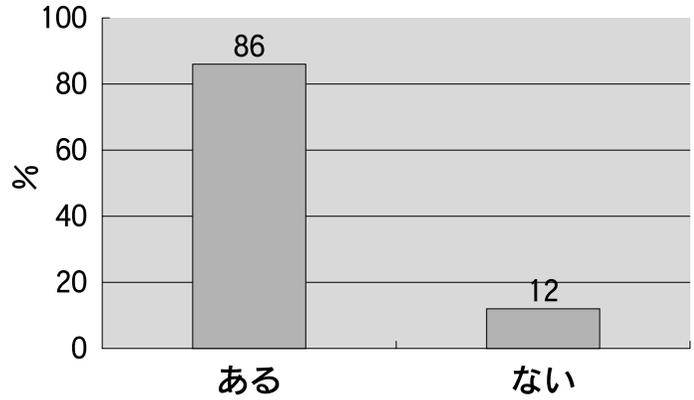


図7 信仰宗教の有無

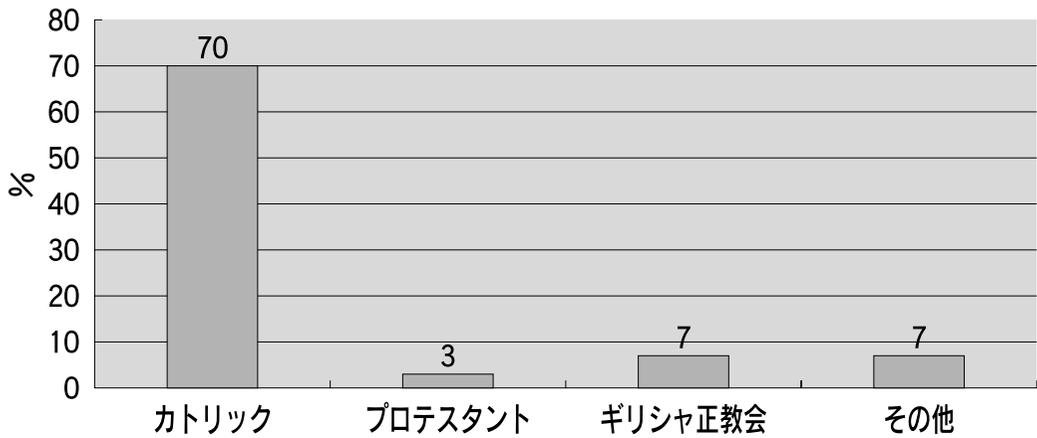


図8 信仰宗教内訳

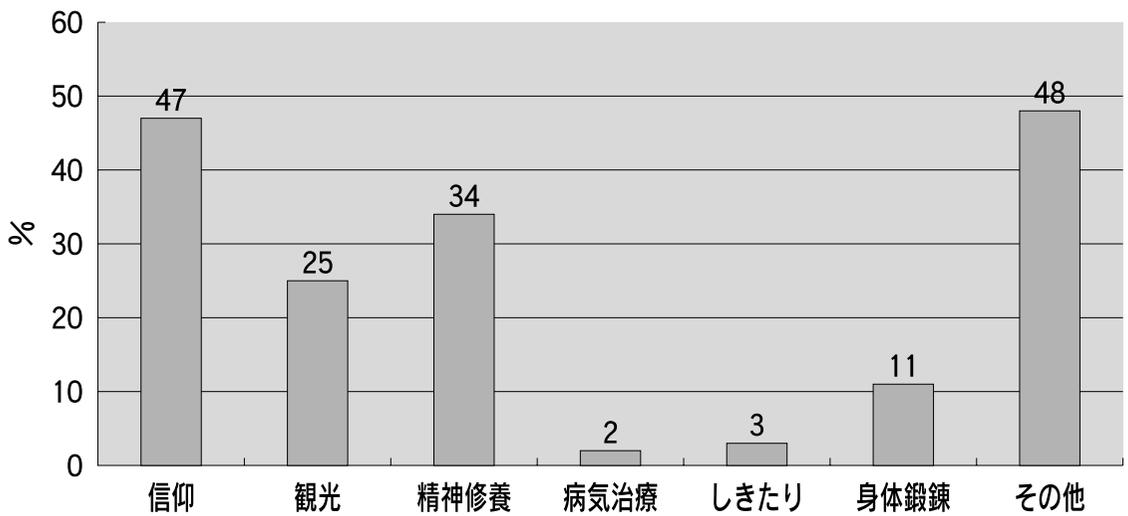


図9 巡礼の動機・目的

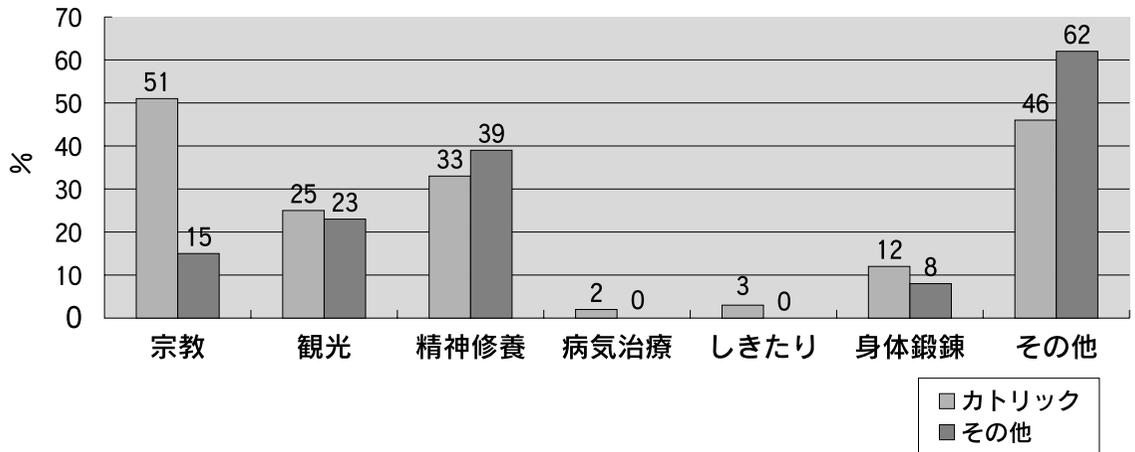


図10 宗教と動機との関係

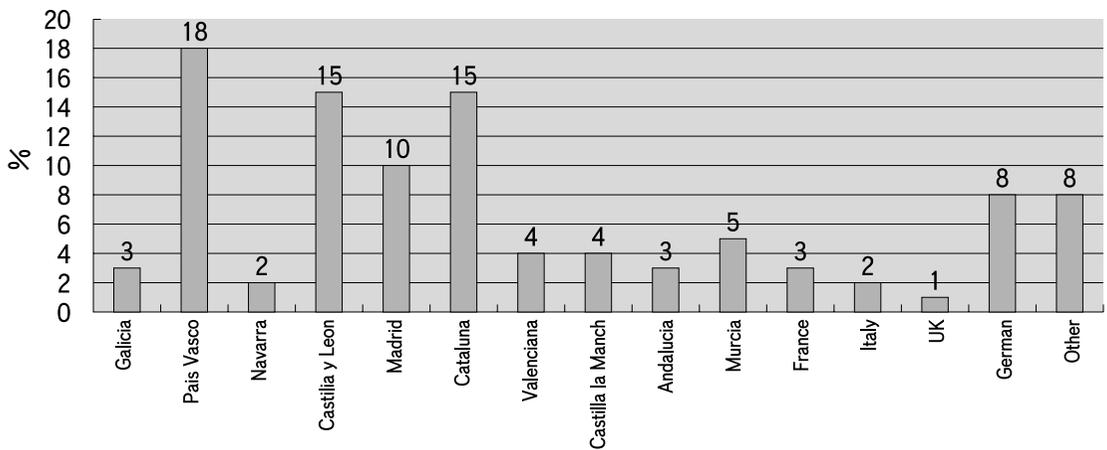


図11 出身地域別構成比

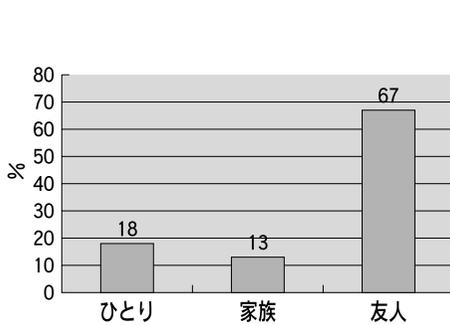


図12 誰と巡礼を行ったか

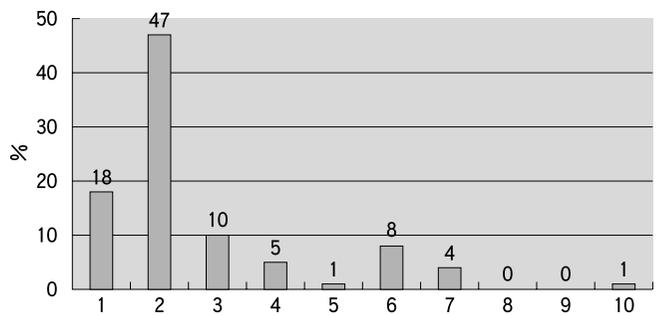
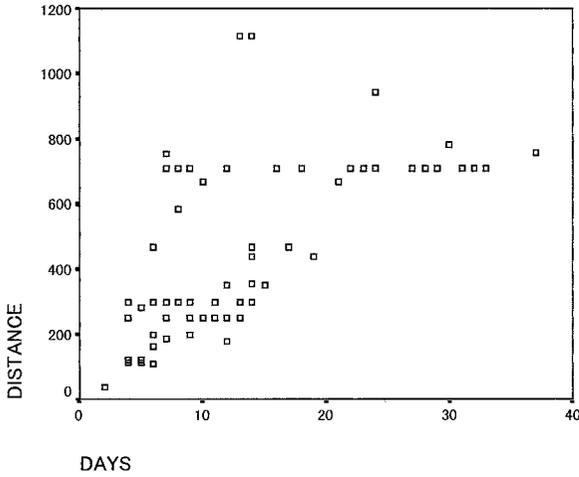
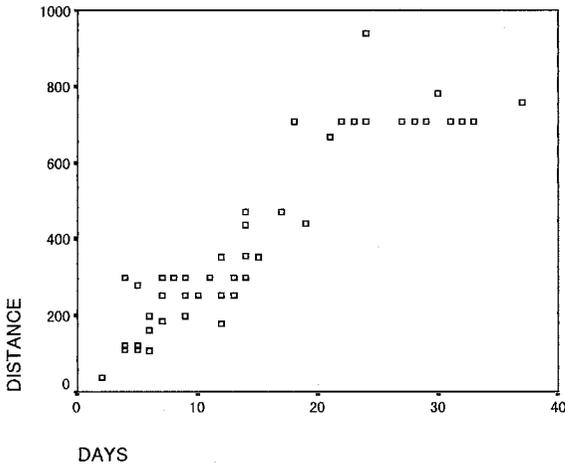


図13 人数別構成比



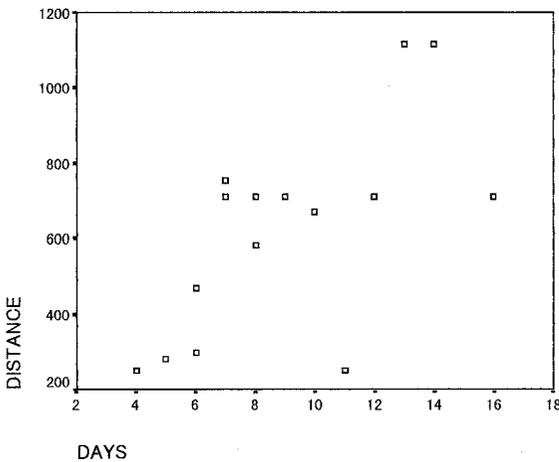
相関係数 $R = .68$ $R^2 = .46$
 回帰方程式：距離 = $20.34 \times$ 巡礼日数 + 167.77

図14 巡礼日数と巡礼距離の関係



相関係数 $R = .94$ $R^2 = .88$
 回帰方程式：距離 = $24.38 \times$ 日数 + 37.26

図15 徒歩巡礼者における巡礼日数と巡礼距離の関係



相関係数 $R = .66$ $R^2 = .43$
 回帰方程式：距離 = $52.26 \times$ 日数 + 159.26

図16 自転車巡礼者における巡礼日数と巡礼距離の関係

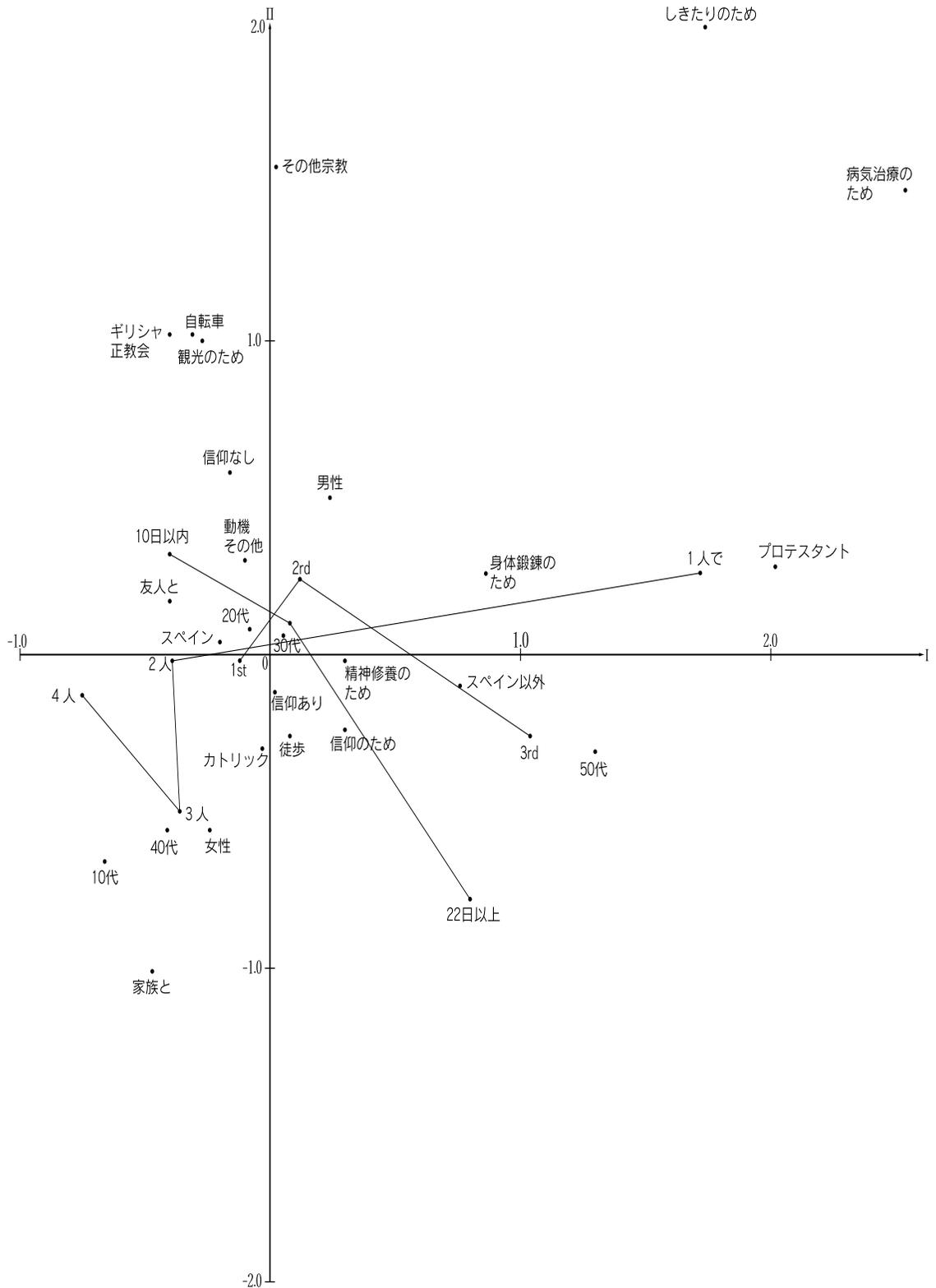


図17 最適尺度法による巡礼行動のパターン分析

Categories) を使用)。図17に示したように、第一次元を判別している主要な変数は、巡礼が個人あるいは集団で行われたかという、巡礼形態に関する変数であることが明らかになった。正の方向に高いウエイト・ベクトルが得られているカテゴリーは、一人で巡礼、プロテスタント、年齢は50歳代、巡礼回数は三回以上である。負の方向に高い数値が与えられたカテゴリーは、10歳代、40歳代、4人以上で巡礼。この軸は、藤原(1999b)がファティマ、エル・ロッシオー、サンチャゴ・デ・コンポステラ、四国八十八箇所遍路等を参与観察した結果に基づく、巡礼行動の理論的次元、すなわち、巡礼単位の個人性—集団性と一致している。更に異なる巡礼間比較に基づく集団レベルの知見が、一つの巡礼内における巡礼者の個人差変動レベルにおいても見出されるという興味深い知見であるように思われる。

第二次元を弁別している変数は、信仰している宗教の内容、巡礼の手段、巡礼の動機である。正の方向に高い数値が与えられているカテゴリーは、自転車による巡礼、巡礼の動機は観光、ギリシャ正教徒、信仰の無い人々、といった人々である。負の方向に高いウエイト・ベクトルのカテゴリーは、宗教的信仰を持っている、カトリック教徒、徒歩で家族とともに巡礼、巡礼の動機は信仰のため、10歳代、40歳代、女性等である。この次元は、ケース・スタディーにより四国八十八箇所遍路経験者を対象に行って見出された次元、宗教的動機の強弱に対応している。

これらの二次元を組み合わせると巡礼者は図18に示したように4つに類型化することができるであろう。第一象限は、非宗教的動機に基づく長期的単独巡礼者、第二象限は、無信仰の短期的集団自転車巡礼者、第三象限はカトリック信仰に基づく短期的集団巡礼者、第四象限はカトリック信仰に基づく長期的単独巡礼者ということになる。こうした結果は、藤原(1999b)が指摘した、巡礼行動へと駆り立てる入力変数が巡礼形態(個人—集団)と信仰の有無あるいは信仰の内容(カトリック—それ以外)から成り立っていることを示唆している。更には、巡礼者を二次元の組み合わせで4つにパターン化できることが明らかになった。

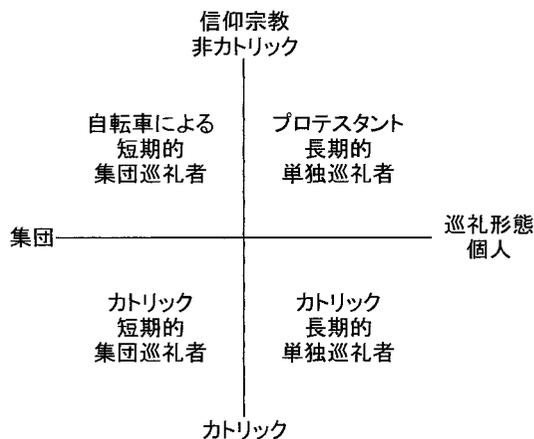


図18 四つのタイプの巡礼者

今回の調査では主にデモグラフィックな要因についてしか測定していないので、今後は藤原(1999b)が指摘した、巡礼行動の過程や残効効果に関する変数を測定し、精緻化してゆく作業が必要であろう。

引用文献

Bottineau, Y 1983 Les Chemins de Saint-Jacques. Les editions Arthand. 小佐井伸次・入江和也 訳「サンチャゴ巡礼の道」河出書房新社

Dupront, A. 1985 Saint-Jacques de Compostelle. Brepols I.G.P. 田辺保 監訳「サンチャゴ巡礼の世界」原書房

Frey, N.L. 1998 Pilgrim Stories: On and Off the Road to Santiago. University of California Press.

藤原武弘 1998 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(1) 中国四国心理学会論文集, 第31巻, 99.

藤原武弘 1999a 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(2), 日本心理学会第63回大会論文集, 71.

藤原武弘 1999b 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(1) 関西学院大学社会学部紀要, 第82号, 157—168.

藤原武弘 2000 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(2) 関西学院大学社会学部紀

要, 第85号, 109—115.

巡礼研究会編 2000 巡礼論集 1 巡礼研究の可能性
岩田書院

関哲行 1999 中世サンチャゴ巡礼と民衆信仰 歴
史学会編 巡礼と民衆信仰 青木書店 pp.
126—159.

真野俊和 1996 講座日本の巡礼 第二巻 聖跡巡
礼 雄山閣

付記：本研究は、1997年度関西学院大学共同研究
費一般 A、ならびに、平成 9・10年度文部省科学
研究費補助金（萌芽的研究課題番号09871031代表
者藤原武弘）の助成によるものである。

A Social Psychological Study of Pilgrimage Behavior as Self Process (3)

ABSTRACT

This study aims to describe and analyze the pilgrim's behavior from the point of view of self process. Interview subjects were 107 pilgrims who had visited Santigao de Compostela in Spain by foot and by bicycle. The results indicated that there were two dimensional factors involved in the process of pilgrimage behavior; the form of pilgrimage, i.e. individual vs. group; and motivational input variable, i.e. intensity and content of religious faith.

Key Words: pilgrimage behavior, self process, Santiago de Compostela